
曇れることのない海は・・・・・・・・

志榮嵩耶

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

晏れることのない海は……

【Nコード】

N1073A

【作者名】

志榮嵩耶

【あらすじ】

男尊女卑の国が舞台。女は教育すら受けさせてもらえない上、15になると美しい女は国の官吏相手に身体を売らなければならないという女にとっては最悪な国そこで出逢ってしまう晏亜くればと海音かいんのラブストーリー。しかし1部では海音の母となる梨音りおんと父、良春りょうしゅんのお話海音が生まれて海音と晏亜が出逢うまでを描きます

晏れることのない海は……

tyrannies 弧特 (前書き)

最初はおそらく?って思うような意味不明なことになってますが・
だんだんに判明してきます

純粹なラブストーリーではなく今はまだブラックに出来ています。心
が温かくなったり、愉快的気分にはおそらくなれないと思います・
・それでも読みたい方はどうぞ!

曇れることのない海は・・・・・

tyrannies ~ 孤特 ~

曇れることのない海は.....
~ 孤特 ~

tyrannies

あるのなら

この地に太陽と恵みが

日が訪れるのだろう

いつの日にか報われる

持ち主へ

実る果実は綺麗な手の

持ち主へ

腐った果実は醜い手の

なら命を捨てればいい

零れた果実が欲しいの

怖さを忘れ

生に飢える人々は死の

らの手で葬り去ることが

ただ今という真実を自

る愚かな仕草

足掻きながら唯一求め

のか

誰に求められ生まれた

のか

誰に憎まれ死んでいく

曇れることのない海は.....

いないこの地球で

瞳の澄んだ住人が今は

実に縊るだけ

確かめられる術はなく
確かめようとも思わず
今はただ腐りきった果

ただわからないだけ

欲しいものは何か
望まないのは全て
わかりたいんじゃない

曇れることのない海は・・・・

周りの風景はきつと変わらないのかもしれない
たとえ、昨日まで生きていた人間がそこで野垂れ死にしていたとし
ても

私が殺ったんじゃないの、美味しいものを食べてる人が殺したの
だって私に誰かを殺して得る物なんて井戸の水のひと掬いよりも意
味がないのだから
言葉だって思想だって別に必要なんじゃないの

身体だつて精神だつて別に必要なんじゃないの
今はこの使い物にならない耳を余計に壊してくこの爆音がどうにか
なればいいと思つてる

瞳が澄んでる人間は妖精とか神様が見えるつて昨日生きてた軍の首
領が言つてた

きつと嘘……。そんなものが今、この世に存在しているのなら私
はなぜここにいるの？

澄んで見えるんじゃない、澄んでない人間しかいないから見えない

ほら・・・また、どつかの浮浪者の首が転がつてきた

この浮浪者だつてきつと報われて良かったのよ

無いものねだりしか出来ないに凡人と全て持つてる私とは何もかも
が違う

紫泉慶が崩壊？そんな甘い話があつたらそこらの屍骸に集つてる虫
が寄つてくるわ

もしもあれが壊れる時が来たのなら世界の崩壊、少なくともこの国
の崩壊

崩壊しても私の利益なんてこれっぽっちもないの

女が増えるだけ、身体の汚れた女が増えるだけ、そして死ぬだけ
また歩く道が細くなる

どこを見ても街のオブリエみたいに置いてある屍はもう花すらも手
向けてもらえない

だつてこの国では死んだ方の負け。生きてる人間が勝ち
死ねば天国とか地獄に逝くらしいけど今はそんなもの興味が無い

「雨ね・・・」

ほら廃人たちが無意味に起きだした。ゾンビみたいに気色が悪い・・・

曇れることのない海は・・・・・・・・

。そんなに雨水が美味しいのかいつか食してみた

私はそんなクダラナイ生き方も育ち方もしない

だって私は凡人でもないし、偉人でもないの

もちろん口を開けて、天を仰ぐあの廃人もどきでもない

「でもあんたたちみたいに死んでいいのに生きてる奴らとも違うの」

そう含みたつぷりの言葉を私よりも背丈が無い幼い無知脳の少女に
捧げた

そして他人のように男達が集う酒場にくり出した

酒場に入った瞬間、私にふさわしい酒の香りが鼻腔を支配した

「おお梨音ちゃん。何飲む？」

「そうね・・・とりあえずワイン」

古びた木製のカウンターには仕事もせず呑んだ暮れる男達が国の
情勢について語ってた。次第に強くなる雨音に混じって遠く遠いど
こかで爆音の音がする

「まだ終わらないの・・・ここまで来たらもう国揚げての大戦争か
なんかすれればいいじゃない」

「まあ政府も大変なんだよ。ああ見えてフュール族の一件が他国に
漏れないようにしてるんだし」

「ここにもフュール族がいるわよ・・・って政府に教えてあげようか
しら」

「でもよくそのタトウーしてて平気だね」

「ほんと・・・。まだここには政府軍も来ないみたいだし・・・そんな

曇れることのない海は・・・・・・・・

首都ばつか壊しても仕方ないじゃないね」

「ずっと気になってたことがあるんだけども梨音ちゃん聞いてもいい？」

「どうぞ・・・タダ酒の分を何でも聞いて」

「この国の女は話せないだろ？なんで」

「ああ・・・簡単な話。母親は国が躍起になって探してるフュール族だけど父親は他国にいる官吏。10までは私も他の国にいたし。教育だつて受けさせてもらつてた」

「ああそれで」

「でもなんであたしはここに入れるの？」

「まあ律久がお気に入りだからだろ？」

「誰それ？」

「前にこの常連だつた、国の野郎。でも今は軍のいいところにいるらしい」

「そんなのがどうして？」

「前、覚えてないか・・・？路上で男に向かって罵声上げてた梨音ちゃんをここに連れてきて匿つた奴」

「ああ・・・あの調子乗つてる男ね。」

「あいつがさ。梨音ちゃんに一目惚れしたらしくて。ほら男って好きな女を特別扱いするだろ？あれでさ・・・梨音ちゃんは周りの女と違って喋れるし・・・汚れて野垂れ死にしてほしくなかつたんだろ？」

「なるほど・・・。禾影さんにはそついう人いないの？」

「いたけど・・・呼びがね」

「ああ紫泉ね」

「気をつけたほうがいい。もう見た目だけで梨音ちゃんは仕事出来そうでもない」

「13には見えない？」

「まず13でワインを嗜んでる時点で」

「やっぱね……。フュールでも仕事するのかしら？」

「あゝ最悪な選択かもしれないね」

「身売りが死刑かって感じ？」

「まあもしもの場合は良春がどうにかするんじゃない？」

「あたしあの人あんま好かないのよね。顔はいいけど中途半端な感じが嫌」

「あいつは優柔不断だしな」

「嫌よ〜白か黒か出せない男は」

「白ってどんな男？」

「ソフトな温かいかんじのヘタレ野郎。黒はハードな冷酷なあたしのタイプ」

「あ……。良春終わったな。あいつ頑張っても白だろっしな」

「まああの人は黒に元々なれそうもないわね」

「そしてこの後、私はその白にも黒にもなれない男に愛されてしま
うのでした」

tyrannies 弧特 (後書き)

ダークなお話を最後まで読んで頂いてほんと感謝感激です!! えつと・・・フール族はそのうちにキャラが説明をしてくれるとおもいますが。軽く言うておくと、普通の人間と瞳や肌の色が違ったり、おかしな刺青が首にあったりで国に隔離させられて・・・ってまあ梨音はその娘ってことになってます。いい加減だなあ・・私。禾影は梨音を看板娘というような感覚で見えます。果たして13でお酒を呑んで酔わないのかな? 梨音ちゃん・・。この作品を読んだ友人達にも梨音は大好評です・・母なるともつとすごいことになります・・母になつたほうが好評だというのが事実作者からするとちょっとびみよくな心情です

曇れることのない海は・・・・

曇れることのない海は・・・・・・・・

deadleaves 不義 (前書き)

自分が酒を呑めるワケを知った梨音。そして助けられた日以来に梨音は初めて良春とお酒を呑みます。今回は前話よりも笑えるかな？と思ってるので前話のイメージでもう嫌だ！と思っただ方もいると思うのですが
 今回は読んでもちよっとはユルくなってるのでチャレンジしてみてください (泣)

deadleaves 不義

deadleaves

不義

のであれば

いつか必ず幕が下りる

など

始めから演者はいら
ない何も得ずに消える生涯

ない

元々必要であるはずが

である以上

夢が終わることが必然

つたりしない

この世界の全てが不必要
大事なものがあるのなら
きつと敵などを自ら作

むのなら

捨てられない何かに悩

ていい

元々何も手に入れなく

なったら

海からいつか水が無く

なったら

空からいつか光がなく

曇れることのない海は.....

しょうか？

私から何がなくなったら
私は私でなくなるので

何も要らない

全て要らない

誰もが消えればいい

今でもあたしはこうやって酒を呑んでいられる。だけど何でだか・・・あの白男が隣にいる

「悪いけど・・・好みじゃないのよねえ」

「いいじゃん。俺は梨音ちゃんが好きなんだよ」

13で官吏だと・・・そしてあたしより酒に弱い・・・時々この店にやって来ては顔を朱に染めグデグデに酔っ払い道端で吐く本気でウザい。いくらこいつのおかげで酒が呑め、政府の奴らが来た時にあたしを死守してくれるとはいえ・・・嫌

顔と金はいいとして。その救いようも無い、だらしない性格が本気で嫌・・・所詮・白

時々、見せる年相応な素顔には心を奪われる・・・奪われたことあったかもしれない

ただ・・・他が無理。だいたい・・・女を抱いたこともないくせに厭らしい話を唾を飛ばしながら語る生物。こういうのが官吏である以上この国がまともになれるわけがない

曇れることのない海は・・・

どんな身分かも知らない、親がどのくらいの金持ちで、屋根のある床がある地で寝てるのか・・・？想像も出来ないししたくもない

いつだったか、この世にはいなければならぬ必要な者といなくて構わない・・・むしろいるべきではない unnecessary 者に分けられると聞いた

もしもノウノウと酒を嗜み、好きなだけ欲求を満たすような者どもが必要な物体なのだったら・・・ unnecessary な者なんてこの世にいないもしも本当にそんな風に人が分けられるのなら・・・必要な人間以外は今すぐ死ねばいい。誰が分けるのか・・・？そんなこと知らないだって・・・人類を分けられるような賢い選別が出来るような奴、この世にいないのだから。いたりしたらあたしはこんなにも不幸じゃない

別に誰が一番、不幸かなんか比べたくも争いたくもない。そんなヒマがあるのなら今すぐ死んで欲しい

あたしが不幸なのは事実。だって幸福な奴が隣で泥酔してるの。世界は全て比例して動いてるの。幸せな奴がいるということは不幸な奴がいるに決まってる。人生なんて、生涯なんて不幸な人間がいるから哀れな生き物がいるから、誰かが幸福で愉快なのだ悟った

前にいたマトモな国では、母親は家にいた。周りからは綺麗な母親だとか首の刺青と自黒な素肌がお洒落だと言われて。父は毎晩、帰って来て美味しい夕食と家族の談話を楽しんでた。官吏だとは言えど家庭を顧みずにはしなかった

なぜこの国では刺青も小麦色の肌も碧い瞳も。そしてこの黒い髪も・・・。オカシイ者扱いを受けなければならぬのか？あの国では母を中心に黒髪はブームになっていたし、碧い瞳は天使の様な瞳だとまで言われた。拓けている自由な国は他人の文化や特徴を受け入れる。

だから発展する

それが当然だと思ってた。きっと世界中、この風貌に羨望の瞳を向けてくれると思ってた。父が死んで、母は行き場を失った。そして故郷に戻った。だけど・母ももういない

ここに来る意味があったのか？あるはずもない。あるのなら教えて欲しい・今すぐにちゃんと求めた答えを授けてほしい

「梨音ちゃん」

「・・・何よ？」

「ここは危険だよお」

「ああそう」

顔を真っ赤にした酔っ払いにそんな忠告、受けても怖くも無い。どつちかって言うとおんたのほうは何倍も何千倍もあたしにしてみたら危険

「ほんとだよお」

「じゃあ具体的に何が？」

「えっ！？俺、ガキだからわかんねえ」

「・・・ってかずっと聞きたいことおんたにあつたの」

「なあ〜にい？」

酔っ払いにまともに相手してるところこっちの脳みそがイカレそうになつてくる。馬鹿がうつるっていうか・・・泣けてくる・・・アホみたいに

「あんだ親の七光りなの？」

「・・・？」

ああ馬鹿&酔っ払いに高度な言葉を投げかけても無駄に決まってる。

曇れることのない海は・・・

もつと早くに気付けば1%くらい労力の無駄遣いを防げたかも

「梨音ちゃん。今のこいつに何聞いても無駄だよ。頭の中、お祭り騒ぎだからさ」

「……はは」

「まあ代わりに俺が答えると……梨音ちゃんの七光りは間違っちゃいない……でも」

「でも……何？」

「こいつは13だろ。なのにこいつの一声でこの店を潰すこと出来る。でも……コイツ自身、まだ幼さ過ぎて気付いてない」

「禾影さんにはわかるの？」

「これでも18なんで」

「……そっか」

「こいつ親父が首都の官吏でさ。いわゆるお偉い様なわけ……んで息子にも早くこの国の国家体制みたいなもんわかりさせるってか……種の洗脳」

「……これで洗脳されてるわけ？」

「いや……意外と苦戦してるらしい。なんでももうさっそく疑問感じちゃってるらしくてさ」

「……何に？」

「梨音ちゃんを愛したが故に紫泉慶の存在も知ったわけで。なんで俺の女が捕られるんだ？」

「ちよつとその前に訂正。あたしはこいつの女じゃない」

「まあそこは……いいとして」

「……ん。続けて。あんま納得できないけど」

「んで……洗脳から逃げてここでこうしてるの」

「ああ……もつとクダラナイ」

「んでどうやら……」

「ん？」

「こいつ梨音ちゃんを連れて亡命覚悟らしいぜ」

曇れることのない海は・・・・・・・・

「・・・一人で行け」

「まああと2年の猶予はあるわけだし」

「そりゃ・・・ね。もちろん一緒に行ったりしないけど」

「でもこういう馬鹿みたいな奴は突拍子もないことやりだすから手に負えない」

「そうだったら、刺し違えてでも遠慮するわ」

「まあ・・・こいつは一生、白の運命だからね」

「どうかで黒に転換しないかしら」

この時の禾影さんの言葉もつとちゃんと受け止めておくべきだったと今更になって後悔してる。ああやつぱりあたしは背伸びが通じないただのガキに違いないのね。酒が呑めても、喋れようと、思想があっても、何を手にしていても。この国にいる以上、この男という以上所詮、お子様な自分

曇れることのない海は・・・・・・・・

deadleaves 不義 (後書き)

えつと・・・とりあえず読んで頂きほんとにありがとうございますっ
！！えつと最初の文は暗くなってましたが終わりの方は少し笑えま
したよね？どうにか明るく努力していきたいと思います。しかし・・・
次からは急展開です。っつかもう急スギでほんと今からでも謝って
おきます！でも読んで見てください (泣)

曇れることのない海は・・・・・・・・

darling（母性）（前書き）

これは前話から一気に話が変わります。2年後の少しだけ大人になった梨音の話です。前話までは良春を散々馬鹿にしていた梨音だったけど・・・。今までのよりはぐっとポジティブになった梨音ちゃんを見てやってくださいっ

darling 母性

母性

darling

あるから人が死ぬ

愛とか夢とかが人間に

形態な物を手にしたから

愛なんていう漠然で無

な希望

誰もが不幸になっていく
夢なんて無意味で安易

かに不幸かわかる

希望を持つから今がい

万民

天秤に乗せて物を量る

せて量りたいのは

だけど誰もが天秤に乗

曇れることのない海は.....

クダラナイ哀れみの花を

自分と他人の不幸の量
自分が軽ければ相手に

曇れることのない海は・・・・

クダラナイ哀れみの花を

だから

誰かよりも

いだけ

不幸なら

幸福なのだろう

れるのだろうか

は一番哀れ

他人が軽ければ自分に

結局周りの誰も不幸

争って不幸比べをして

愚かな優越感に浸りた

もしも生きてるうちが

不幸負けした髑髏達は

命を捨てれば幸福にな

でもきつと命がないの

2年後

どことなく今だダルさが残る朝方。ここに来てからロクにワインも呑んでない。昔のように マトモな建物も道路もここにはない。あるのは爆撃を受けて屋根も壁も失った物体。腐敗した臭いがこの世界を蝕んでいた。

昼なのか夜なのかわからない大きな空。雲なのか煙なのかそれすらも判別出来やしない

遠くにハゲ山が見える。いつから生えていたのか、いつ伐られた

のかすら定かじゃない。

消えることのない屍を焼いた煙・・・そして腐敗臭

どこからかっぱらって来たのか、周りとは違う格好してるあたしに妬みの針が突き刺さる。　周りと同じなのは素足だってことくらいで、周りの女のように胸やら尻が破れた隙間から見　えるような寒々しい格好なんてあたしはしない。あたしは昔から全て違う。幸福に違う。官　吏の服は暖かく丈夫だ。金ボタンに鷲の紋章・・・別に靴が無かったわけじゃない。ただあい　つよりもあたしは靴の大きさが違うから。大きいから軍人に追っかけられた時、靴が脱げる　だからってそこらの浮浪者にあげるわけでもない。ただ飾り物にしてるだけよ・・・紺の官吏　の服は痩せ細った栄養不足な身体には大きすぎてある意味不恰好。美味しい物は食べてな　い・・・ここ最近。だいたいあたしに食える物があるんだったら隣で眠りこける幼子にあげてる

父親の靴を抱きしめて夢に彷徨う子はこの世で一番・・・美しいものみたいだ

「ワインが呑みたい・・・ねっ海音」

15で母になったことには今でも疑問ばかりだ。碧い瞳と黒い髪そしてこの首の刺青。そして土地に不釣り合いなマトモな格好。子育てに不似合いな環境。腐った全て、この世に生を受けたばかりの幼児にはふさわしくないものばかり・・・。指の指紋は掠れてもう傷だらけで爪の隙間には不潔なほど土が詰まってる

そんな指を恋焦がれてるかのように執拗に舐めようとする子供。まだ瞳が開いてまもなくでまだこの世が美しいものばかりだと誤解してる

あたしは子供に刺青なんて入れない。母がどうしてあたしに刺青を入れたかはわかんないけど・・・あたしは海音には入れない

あの白に襲われて出来た哀れな子。産みたくもないのに産んでしまった赤子。あいつは15のくせに2年前よりもっといい地位に上り詰めてる。強引に殴られて気を失ってるスキにユーベリアンの奥山に連れて来られた。ここはもうフュール族はここから去ったのだろうか？

地面には軍がフュール族を捕まえるために使った爆撃の跡が今も生々しく残ってる

フュール族なんて一般人民からすれば10分の1しかいないのに、それを捕まえるために何万つていう一般人が無意味に殺されてる。このまんまじゃフュール族は逃げ延びて一般人が死んで、ユーベリアン大陸ストルウェル連合王国はフュール族の国になるわ

ここの人間達は毎日することもなく、日も当たらず雨も降らないこの土地でただ無意味に田を耕して、咲かない花を育てて、茂らない木に思いも巡らせ・・・すること全てがくだらなくただ毎日、毎日が墮落している

「良春・・・・？」

集落の崖はあたしの場所。誰と関わるわけでもなくただただ集落を見下ろせるその崖に座る。母子はただ哀れなだけ。あいつが来るのをただただ忠実に待つ。昔はあいつが嫌いだった

ロクにいい人生を歩んできたわけでも無いのにあたしよりもいい暮らしをしていた。ハードでクールな男になら攫われてもいいと思つたのに。何でよりもよってあの優柔不断な白男に攫われ襲われあげくに身籠りああアホみたいだ・・あたし

あたしが10まで生きてたあの国では12月25日は幸福な日だと言われてた。美味しい料。理と豪華な飾り。そして高価な贈り物をもたらえる。そんな日にこんな貧困な街で生まれてしまった息子は・

曇れることのない海は・・・・・・・・

・ 誰にも祝福されることもなく生まれた

あたしは一人でどしゃぶりの雨の中、彼を産み落とした。どうやって育てていいのかなんて 15の娘にわかるわけもない

親もいなければ知り合いもない。身籠った重い身体で似合わない幼い顔。他のマトモな国 だったらきつと医者に誰かが運んでくれたの。ここじゃ運ぶところか、あたしが死んだ隙にあたしの着てる服を奪おうとする奴らばかり。海音だってあたしが目を離せば、すぐに身売りに攫われる。そして子供を売って自分の食い扶持にする・そんな国でこの子がちゃんと育つのかなんてあたしにはわからない

「梨音？」

「へっ？」

あたしを呼ぶ人間なんてそうそういるわけない。そして普通にあたし達親子に近づこうとする人間もいない

「梨音？寒い中外にいるなよ」

「中なんてないわよ」

「は？」

「ここに人間が住む場所なんてないわよ」

「・・・・ごめん」

あたしはこいつと結婚した。それにはまずこいつが黒になることを条件に結婚した。15でどれくらい黒になれるのか知ったもんじやなかったけど意外と黒になれるもんだ・って思った

「でも・・・お前さ」

「何・・・？」

「なんで海音ってつけたんだ？」

「あたしは海に行ったことも漣なんていう綺麗なもの見たことも聞いたこともないの」

曇れることのない海は・・・・・・・・

「ああ」

「それで・・・あたしの字を入れたらこんな風な名前になったのよ」

「命名の理由が中途半端だな」

「そうかもしれないわね」

「いつか3人で海に行かないか？」

「・・・徒歩で？」

「は？」

「徒歩でこんな山奥から子供連れて海に行くの？行けるわけないじゃない」

「・・・確かに」

「出来ないことは言わないで」

「ああそう・・・」

「でも自分の故郷でもなくせになんでこんな山奥にあたし達を連れて来たのよ」

「・・・なんとなく」

「・・・ああそう」

「・・・どしたの？」

「貴方に根拠とか論理求めても無理だつてこと忘れてた」

「お前・・・俺のこと馬鹿にしてるだろ？」

「うっん。やっぱり貴方は馬鹿だつてこと再認識しただけだから」

いつからだろう？人間が嫌いで信じるなんてことも知らなかったのに・・・でも今はこの男はいいとして海音だけでも守ろうって思えた

それが母性愛とかいう漠然とした物体なのか・・・。それともただ優しい人間にでもなってしまうたのか？自分でもわからないしわかりたくない

曇ることのない海は・・・・・・・・

この消える間近みたいな蠟燭の灯。そんな日常がいつまでも続け
ばいいのに、なんて曇った空を・・・・・・・・見ながら思った

d a r l i n g (母性) (後書き)

えっと・・・最後のほうは梨音・あんた変わったねえって思えてくるような感じがしてなりません(あたしだけ?) やっぱ子供が出来るって母性本能が生まれるんだなあって・・・子供がいないあたしには推測でしか書けなかったですけど・・・。ここからあともうちょっとは梨音の幸福が続きますが・・・。あることを理由にこっから怒涛の人生になっちゃいます
海音は主役なのにまだまだ赤ちゃんでストーリーにはまだ何も・・・って次話ではもう喋れるくらいまで
年月が過ぎちゃうかもしれないです。3話も読んで頂いてほんとに感謝します!これから長い作品ですけどぜひとも読んで頂きたいです!!

曇れることのない海は・・・

i n n o c e n t 悲鳴 (前書き)

今回は5歳の海音です。はい飛ばしすぎでごめんなさい……。今回は前話よりもお母さんらしくなった梨音が見物です……。作者が言うことじゃないか(笑) < b r >子を守るうとする母そして……。海音が一番いい環境は?と考えてる母です。ちなみに良春は今回いいです……。今回は海音が喋ってます。海音の幼い頃を初めて描いたのでなんかびみよくな仕上がりになっちゃいました。とりあえず読んでみてください

曇れることのない海は。。。。。

innocent 悲鳴

innocent

悲鳴

けるのは

雨が降って女が口を開

が変わればいって

今でも変わることがない
いつかこの腐った世界

た時から思ってた

きつとここに足を着け

ない理由は

この国が無ければなら

の上にいる奴らが

神や天使や偉そうに空

が咲き誇ろうとも

知ってるわけもなく
青葉が茂ろうとも花々

とも

落葉が人々を魅せよう

うな木々

銀世界と廃人の腕のよ

が手に入ってるからで

何もいらぬのは全て

手に入れば笑顔に

何も欲しくないは何を

曇れることのない海は.....

からわからないから

なれるか生まれたとき

何を見ても怯え

何を聞いても泣き

ただここにいる人間に

幸福も不幸もわからない

ここの人民は不幸の形

「何か食べたい物ある？」

「・・・・ない」

「ああそう・・・・」

可愛くない子供。あたしにそっくり。未来にも現在にも希望なんて持たずに今日どう生きるかに全てを費やしてる

昔、育ったマトモな国では義務教育なんてものを受けさせてもらった。母親が言うには大学という所に20くらいまで通ってればいい家にもいい夫にも巡り会えるんだって言ってた。そして一生涯生活に困らない程の金が入ると・・・・言ってた

あたしにはいい家もいい夫にも。そして金も20になった今でも手に入ってる。きつとこの国でそんな幸せなもの手に入られる

人間なんていなくて。実際、官吏を夫に持つあたしだって。地面這いずり回って、今日の食い扶持を探すのに必死だ

国の頂点で働く官吏だって皆が皆、善い暮らししてるわけじゃない・・・・。きつと国でいい暮らししてるのは王族と大統領くらいよ

王族に関しては、意味のわからない理屈から男尊女卑なんていうものを勝手に自分の地位を濫用して・・・・。そんな知ってはいけない禁忌な範囲に足を踏み入れてしまったあたしには。もうこの国

にいたくないという気持ちだけが日に日に募っていくばかりだった。それは官吏である良春には言っていない。言ったら離婚なんてことになってあたしが生きていけるわけもない・・海音だつてどうなるかわからない

きつと何かない限りあたしは良春についていく・・それしかないんだから・・他の国だつたらあたしはどんな風に生きてるんだろう？

5年も生きればどんなにこの世界が汚れて不公平なものかだんだんわかつてくると思う。しかも46時中あたしみたいな母親が隣にいれば全てを斜に構えるに決まつてる。これから一生、この子はマトモにちゃんと物を見ながら生きていけるのかあたしみたいに可哀相にしか

生きていけなくなるんじゃないかと思う

父の色を引き継いだ海音はフール族の特徴、碧い瞳も黒い髪も陽に焼けたような色黒な肌もなかった。一般種の良春の血が多く流れてるのか

彼は茶の瞳で茶の髪の色。見た目は社会的に生きていける・・問題はあたしの生き写しのような冷酷で信用とか純粹という言葉を知らない不自由な生き方しか出来ない性格

「寒くない？」

「・・・・・・・・」

良春が首都で買ってきた暖かい服を身に纏った海音は周りからの妬みの瞳に5歳で慣れたよう・・けどあたしのように自分は特別だとか自分が人よりも上だとか傲慢な考えは持つてないようだし・・そして海音は妬みの瞳や隙あらば命を奪つてやるうという考えの奴らから

ひたすら怯えてあたしから生まれてから一度も離れたこともなく

曇れることのない海は・・・・・・・・

て……。あたしは20年間生まれてきて初めて誰かに信用され頼られてる

「ねえ・・・梨音」

「うん？」

海音は5歳になるにも関わらずあたしの服を汗ばむほど強く握ってる。そしてか細い高い声で海音はあたしにいつも問いかける。少ない言語をあたしに何かを伝えようと。。。

「・・・いつ・・・いつになったら？」

「何が・・・？」

「・・・ここから・・・」

「うーん良春が官吏だからね」

「・・・うう」

「いつかこんな所出よう・・・」

「いつ？」

「いや・・・あたしにはわからない」

「だれ・・・だったらわかるの？」

「・・・誰にもわかんないね。あたし達ができるのが先かこの国が終わるのが先か・・・それとも」

「それとも？」

あたし達が殺されるのが先か・・・そんなこと5歳児に言った所で無駄に海音の心を傷つけるだけだ・・・あたしだって他に向ける先のない愛情があったりするんだ

どんなに他の人間を・・・この国で傷つけて痛めて・・・。周りの人間にいくら冷酷だの愛がないだの言われ続けたけど・・・今は海音にしか愛を注げない哀れな女

「・・・梨音？」

「なんでもない・・・いつかあたし達が毎日笑える日がくれればいいね」

曇れることのない海は・・・・・・・・

「うん」

海音のためにも、こんな服脱がせて周りの人間と同じようなボロボロに破れて肌が丸見えな服を着せたほうがいいのか？でも今更そんな格好をさせても今までのあたし達の行動で命の保障なんかあるわけなくて・・・周りの人間が飢えて餓死してる死体の隣であたし達は良春がくれた僅かな食べものを食してた・・・それに・・・周りの幼子はまた別のことで海音に妬みの瞳を見せてること・・・あたしは最近知った

海音は5歳になっても栄養不足で軽かった。あたしは10までいた国での栄養を溢れんばかりにもらって割かし成長した。10でここに来たあたしはもうすでに成人した大人の女よりも背が高かった・・・首都にもし海音だけがいたら・・・きつと働かない男達が海音をきつと

育てるんだらう・・・。栄養もたくさんあつて美味しいものを・・・。それも正解なのかもしれない

あたしは13の時にお世話になった禾影さんと身長があんまり変わらなかった。禾影さんが別に低かったわけじゃない。母親が死んで・・・すぐにあたしは禾影さんの所に通った・・・だからあたしは成長がこれと違って止まることはなかった。だから良春が170以上あつても、あまり

変わらなかった。あたしは160はあつたし・・・でも海音はここで生まれここで育ってしまったから・・・周りの子供よりは成長もしてる

海音は座ってるあたしによく抱きついて首に手を掛けてる・・・。そして一言あたしの耳元で呟いた。そして海音が一番怯えてる理由がわかった

「みんなにはお母さんがいないんだ・・・」

曇れることのない海は・・・・・・・・

それはそうだ……。男尊女卑のこの国で……。女は汚れたものでしかないのであって、腹から男の子を産んだ瞬間、女はごみ同然に捨てられる

そしてこの国では母親というものは存在しない……。全ての家庭が父子家庭であるから

「うん……。だね」

「どして?」

「まだ知るのには早過ぎるよ……」

「ふう〜ん」

いつか君に話そう……。この国が壊れ始めた……。狂乱な物語を……。そうそれはある王族の女が言った一言が……。不幸になったのだから

i n n o c e n t 悲鳴 (後書き)

さあどうでしたか？そんなに暗くはせず梨音ママの心の葛藤がテーマでした（嘘、今考えた）梨音と海音の命は46時中狙われてきつとママは寝るヒマもないのでは？なうんて勝手な見解したりして。えっと次話またまた海音が成長します。そしてこの国が男尊女卑になった理由が明かされます。まだ描いてないんでどう描くか本気で悩んでいます。王族の方を書いて……ってまあお楽しみくださいそれが終わると律久家の悲劇が……ほんとこれ書くと皆さん読むのをやめちゃうんでは？なうんて不安もあります……とりあえず待っててください 明日か明後日には投稿します

曇れることのない海は……

v i c t i m

く計画く(前書き)

今回この国の謎が明らかになります
これを読まれると多分、
皇女に怒り破裂になるのでは？というか個人的に怒って欲しいです

とりあえず憎みたつぷりで今回の作品、一人を書きました。
・誰のことかは後書きで・・・って読んじゃえば
かなりはつきりしますね。最後の梨音と海音の会話はこれからの(というか次
話の)序章っぽくなってます
でわでわお楽しみください

曇れることのない海は・・・・・・

V i c t i m

く計画く

V i c t i m

く計画く

消えたとしたら？

いつの日か消えない傷が

体を失うのでしょ

いつの日か消える前に身

の炎を

ああ間違えた全てに烈火

真白な花束を

ああ犠牲になつた全てに

葉は

高い位置にいる者に
不幸は一生わからない
高い位置の人間が言う言

だけ

無意味に凡人を殺すだけ
本当に必要な人間は凡人

奴らは

クダラナイ血筋の王家の

しまえばいい

巢の無い鳥の餌になつて

すら忘れ

自分が人間だということ

曇れることのない海は・・・・

ただ愉快にノウノウと生

きてる奴等

ああ万民に声援を
ああ王族に罵声を
いつか消えるこの生命を
なぜ無意味な王族に渡さ

なければならぬのだろう

今から200年以上も前の話

「なぜだ？なぜ私を愛さぬ？」

「・・・申し訳ありません・・・」

「なぜだ？碎槻・・・私を愛せば全てが手に入るのだぞ」

「・・・お断りいたします・・・杞空さま」

「なぜだ理由を述べよ」

金髪その女は烈火の如く怒りながら、自分に跪く茶髪の青年に問答をしていた。まるで彼女の心を表わすかのような朱の絨毯の上で

「・・・それは」

「それはなんだ!？」

「・・・」

「おぬしまさか儂以外に特別な女がいるではないだろうな・・・」

自分よりも身の丈があるその男に駆け寄り、男の胸倉を掴みながらそう問いかけた。まるで子羊を相手にした獅子のように脅すかのように

男は女から瞳を逸らすとまるでそうだと認めるように女を見つめた

「そうなのだな・・・」

曇れることのない海は・・・

その言葉に男は頷き、女は踵返しのように男を背にして、二人の周りにいた臣下達に向けてこう言い放った

「皆の者！この国で美しい男に愛される女は儂だけで良いのだ。いか皆の者！この国の女を全て不幸にし男から愛されぬようにするのだ！」

「！！！！」

「この国の儂以外の女は・・・男尊女卑にしひとつも自由をあげてはならぬ」

「・・・というと皇女さま？」

「食べ物あげてはならぬ。家を与えてはならぬ。男を愛してはならぬ。勉強を教えてはならぬ。男を神のように称えなければならぬ」

「しかしそうになると・・・紫泉慶は・・・？」

紫泉だと・・・。15になれば国の美しい女は強引に拉致され管理直属の組織に入らなければいけない・・・することはただ一つ。優秀な官吏に46時中求められるだけ身体を渡さなければならぬ。男尊女卑にし女が死んでいたらこの組織はどうなるのだ・・・？ならば儂の願いも政府の願いも通すには

「勝手に拉致すればよからう・・・。向こうに連れて行ってから全てを教え込めればよからう」

「全て・・・？」

「言語やマナー、自分のやるべき仕事をだ」

「しかしそんなことになったら国中の男達は汚れた喋れぬ人形に欲求を果たせねばならないのですか？」

「そんな男の精神は女の儂にわかるわけがなからう・・・男の欲なんぞ勝手にすればよからう」

「・・・わかりました。詳しい法の制定についてはまた・・・」

そう言って、臣下達は去って行った。しかし広い王の間に残され

曇れることのない海は・・・・・・・・

た皇女である杞空と碎槻……。そして皇女は男にこう言い放ち出て行った

「この国の女が不幸になるのは全ておぬし所為だ！今更おぬしがどう足掻こうとも結果は変わらぬ」

それから3月という早い速さで法は制定し、職を持っていた女も勉学に勤んでいた女も全て追い出され路上で生きるはめになったのである

僅かに生きる手段は空からの恵み。雨水だけだった。最初は恥を恐れて飲まず食わずだった女達もだんだん細くなる自らの身体を見て、恥を捨て大口を開け空からの恵みを飲んでいた

法にはさまざまなものがあった。子を産んだ時点で女は子を男に渡し路上で生活しなければならなかった……。だからこの国には父子家庭しか存在しなかった。他に男は自由に働き女を好きに遊んでいいという……。その法は杞空がこの世を去っても変わろうとはしなかった

「わかった……。？」

「まあ」

「聞きたいことあったら言ってよ？」

曇れることのない海は・・・・・・・・

「じゃあなんで女達は暴動を起こそうとか他国からの来賓はどうも思わないんだ？」

「暴動を起こさないんじゃないやなくて起こせないのよ。だって彼女達は知能が零なんだから・彼女が知っていると云えば雨水を飲めば多少は生きながらえるってことくらいよ。他国の来賓の時は紫泉の女達に出迎えさせればいいんだから・・・・わかった？」

「うん」

「10の子には難しかった？」

「うん・・・この国には馬鹿しかいないってことがね」

「間違いじゃないわね」

「・・・僕にはそれ以上に謎なことあるんだけど」

「何よ？」

「良春は？」

「それが最近あんまりここ来ないのよね」

「・・・仕事忙しいの？」

「そうなんじゃない？」

「ほんとに・・・？」

「何よほんとに？って」

「意外と浮気されたりして」

「あいつがあたしとあんたを捨てたら」

「捨てたら？」

「あたしはあいつを殺すかもしれないわね」

曇ることのない海は・ ・ ・ ・ ・

v i c t i m

く計画く（後書き）

えつと・・・普通に憎みたっぷり書いたのは杞空です。これから
も私の王族系嫌いがこういうところで暴発してしまいます・・・。
ええこれからも海音編になればもっと悪化していきますくbr>次
話ではこの一家が大変なことに・・・

曇れることのない海は・・・

Illicit(破壊)(前書き)

今回はもうこの章、最終回一個前です
ええあくまでも梨音編が・・・です。自分が想像してたよりもあっさりトラストは固まっ
てしまって少々不満です。でも今回は皆さんには、はっ?っていう展
開になります・・・了承を

曇れることのない海は・・・・・・・・

Illicit 破壊

Illicit 破壊

ったのなら

しまったのだろう

もう空回りしていたのか

の物体を手にした時か

は決して今が

いうこと

りの欠片

しか脳にない

るのではない

ならないから

人間の全てに歯車があ

いつその歯車が狂って

母の腹から出た時点で

それとも言語という名

ただ一っだけわかるの

正常で健全でもない

頭の中で掠めたしくじ

誰もがマトモでないから

貪欲に人を殺めること

殺めたいから武器を握

ただ自分が

殺される前に殺さねば

曇れることのない海は.....

曇れることのない海は・・・・・・・・

間違いなのだろうか？

間よりも幸福に

物に命を捕られるのなら

がマトモな行動

人を殺すことのどこか

誰もが今すれ違った人

生きたいというだけで

自分ではない哀れな生

その前に相手を殺す方

秋

「絶対浮気じゃないの・・・？」

「子供が言う台詞じゃないでしょ？」

「・・・もう秋だし最後に良春がここ来

「んんんっ」

「じゃあ・・・探しに行く？」

「えっ？」

「禾影さんが何か知ってるかもしんな

「・・・誰？」

「じゃあ行くわよ」

「何で今から・・・？」

「もしも浮気してたら殺してやる」

「はいはい・・・」

いし
「」

たの・・・春じゃん
「」

別に前からそんな気がしてなかったワケじゃなくて・・・ただ海音は一途に父の帰りを待ってるのかと思っただから
そうじゃないのなら・・・。12年も一人の女愛せるような真面目でも純粹な男でもない・・・きっと他国で喋れる別の女を捜してるのよ
ただ・・・その理由があたしに飽きたとかいう理由だったら本当に殺してやる

さすがに戦時中なことだけはあつて、首都でも路上は焼死体が山積み
みにされ優雅に酒を嗜んでいた男達ですら今は兵隊となりこの国の
中央部分は崩壊していた

「禾影さんのお店あるのかしら？」

「誰だつて・・・そいつ」

10代の前半は毎日ここを歩いてた。まだ女達がいた頃・・・今はもう・・・生きてる人間の方が珍しかった。瓦礫の下で飢餓に苦しむ子供がいた

壊れていない建物を探す方がよっぽど困難で国が用意したのかそうじゃないのか汚れた布のテント・・・。テントというよりは布が張つてあつてその下にわずかな木箱やボロ布が置いてあつた

慣れ親しんだ店はどこだろうか？・・・煙が消えないこの国。それが焼夷弾の煙なのか屍を焼いた煙なのかそれとも食すために動物を焼いた煙なのか・・・。こんな所に・・・酒飲む場所があるのか？鼻を襲うのは空襲の後の焦げ臭い・・・すぐ前に空襲があつたことを教えてくれる

曇れることのない海は……………

「死んだんじゃないの？」
「そうだったらどうつすかなあ」
「情報なしで帰るのかよ」

「……………う〜んどうするかねえ」
「……………考えろよ」

10分後

「梨音ちゃん!？」
二人で街を歩いてると見知らぬ男が呼んだ。その男は良春と同じ官吏なのか軍服に身を纏っていた。そしてこっちに向かってくる……………
あんだ誰？

「えつと……………誰？」
「禾影の店によく呑んでただけ……………」
「覚えてないか？」

「覚えてないです」
「もしかしてその坊主……………」
「……………あの男の子供」

「へえ〜良春の……………坊主は名前は？」
その男は海音と同じ高さまで膝を曲げると、海音の頭を撫でた……………
しかし他人には容赦なく素直にならない海音……………」

「その前にあんだ誰？」
「俺？俺は瀬陽……………」
「……………海音」

曇れることのない海は……………

「海音かゝあいつが付けたのか？」

「あたし……」

「そういえば梨音ちゃん」

「何？」

「……何をしにこんなトコまで」

「良春知らない？」

「あつれ？一緒だったんじゃないんだ」

「は？」

「さつき良春、禾影の店で……？」

「……ドコ？」

「昔の市庁があつた……」

「なんであんなところに？」

「あそこは建物がしつかりしてるから・

」・

よ
」

分くらい請求してやる」

「そう……行くわよ海音」

「なんでわざわざ浮気現場に行くんだ

「浮気してたら……慰謝料を国一個

「……なんだそれ」

市庁内

曇れることのない海は……………

ガチャ

び出そつぜ」

「なあ立那……こんな国を二人で飛

「だって……嫁も子供……」

「いいんだ！立那！俺はいい父親にな

るから」

「いいの？これって俗に不倫って……」

「不倫相手は身籠っちゃいけないん

ていう法はない」

そんなことをカウンターで語る男の隣にあたしはまるで他人のよう

に座った……。そしてあたしの存在に驚く禾影さんにあたしは赤ワ

インを注文した。もちろんあたしが声を発してもまだ気付いていない

「でも良春？他国に貴方はいけないん

じゃないの？官吏なんだし」

「立那と生まれてくる子供のためなら

そんな地位なんていららないさ」

「そうなの？じゃあ3人で暮らしても

いいの？」

「おう」

「しっかしなあ……良春。梨音ちゃん

にばれたら殺されるぞ」

「ないな……あいつは俺にぞつこんだ

からな」

「しかしなんで梨音ちゃんを捨てたん

だ？」

曇れることのない海は……………

海音がいなきやもう一回
「

「……だってあいつ海音一本じゃん。

「お前……殺されるぞ」

「なんだ禾影？」

「横……」

「横……？……………梨音……！」

「あんたが作った子じゃないの？」

「……いやあそのお」

「ああそう……じゃあ海音がいなかった
たらこんな女とやったりしなかったわけだ？」

「……えっと」

「男に二言はないんじゃないの？ねえ

お父さん？」

「……………」

「わかった……………海音？」

「何？どうせ俺は邪魔者なんじゃない

の？」

「……………うん」

「うんって言うんだ。母親のくせに」

「もう海音あんたはこいつの金遣って

いい学校に通って寮に暮らさない！いいでしょ！？良春」

「……………はい」

Illicit(破壊)(後書き)

えっと・・・裏話を書きます。本当は梨音がこの後「あんたがいるから良春は出てったのよ！」って言いながら海音に虐待をするという・・・なんとモグロイ
次で一応終わりですが・・・あくまでも梨音編があるので
そこからはキャラがめちゃくちや増えて・・・地名も増えて・・・海音のヒロインがとかそれはまた次話の後書きで・・・今回も読んで頂きありがとうございます

曇れることのない海は・・・

CONCLUSION了当(前書き)

今回は最終話です。正直・ぼろぼろでした書くことが無くてかなり焦ってしまいました。最終話というかわゆるおまけです・ほんとうだくだな感じなので
暇つぶし程度に読んでみてください
さい

曇れることのない海は・・・・

CONCLUSION ～～

CONCLUSION ～～

に生きればいい

夢の中でくらいまとも

つても

現実でいかに不幸でも
現実でいかに哀れでも
たとえ世界が今日終わ

つても

たとえ明日が今日終わ

的はなく

もうこの世に生きる目

な愚民でもなく

もう夢や愛を望むよう

ために

ただ全ての人間は死ぬ

くために

ただ全ての人間は傷付

ない

無意味に息をし続けてる
死ぬことが怖いんじゃない

許せない

嫌いな

奴を殺せずに死ぬのが

曇れることのない海は・・・

曇れることのない海は・・・・

る時

も全部が死ねばいいのに

一番怖い

せめて自分の命が終わ

自分の嫌う人間も世界

その後

梨音がどうなったかは知らない。俺は梨音の勝手に国の官吏を作り出すために存在する政府直属の学校に入れられた。寮だって整ってる・。だけど俺以外の子供には母親がいない

俺が生まれてきた意味なんかこの世にきつとない。だけどあの男もあの女も俺は好きではない・。むしろ早く死ねばいいのにとすら思う。良春はどうやら梨音から逃亡するため、愛人と他国に逃げたらしい・。そんなこと俺はどうだっていい

幼い頃から俺が一番相応しくなかったものは愛だ。幸福とか家庭とか習ってもきつと一生使わないに決まってる

俺は一体どうやって生きるのだろうか？どうせ国の直属の学校をまともに進みどうせこの国の腐敗をもっと進めるだけだろう

曇れることのない海は・・・・

良春も海音いない・これはある意味幸福で・誰にも邪魔されない・その後あの立那との子供がもう一人いて海音と3歳しか違わないということも実際はあたしは納得をしてないけどももうどうだつて構わない

じゃあ海音を引き取れと言っけれどそんな馬鹿みたいな真似今更出来るわけがない・・・。もうあたしには夫もいなければ子もない。そうなければいい・・・。それが事実だと・・・。

「梨音さんって独身？」

「うん」

「だよ〜こんな美しい人が子持ちなわけ

けないじゃん」

美男子に囲まれ、良春からかつぱらった感謝料をあたしは他国の避暑地に家を買ひ、酒を呑み、ただ毎日男を家に招くだけ

あたしのことを軽い女だと言っのなら良春は何なのよ！？つて言うるでしょ・海音に恋しさがないことには自分は逆に驚いた。こんなにもあたしは夫にも子にも愛がないということに

あたしは一生働かなくてもいいくらいにせしめた感謝料・・・。別にああ幸せつて24時間思つてるわけじゃない。だけど、爆撃も無ければ死臭もない

不気味な煙も怪しい組織もない。ここには碧に近い色の海・・。海中の珊瑚も綺麗に見える。砂浜には多くの観光客がいる

ここには生活に困らないほどの店もある。1年中涼しいここは・夏には避暑で・冬にはただこの住民が夏に稼いだ金で祭りをやったりしてる

全てが違う

あの頃のような生と死を彷徨うことはないし、あの頃のことを忘れられるくらい毎日が楽だった・だって死ぬことがないのだから

曇れることのない海は・・・・

うでもいいし」

「お前の父親って何してんの？」

「・・・他国で愛人と暮らしてる」

「そりやまた・・・」

「でもまあ側に居られると暑苦しいしど

「そんなものなのか？」

「お前の父親は？」

「今は大臣やってる」

「それはまたたいそうな」

「この国をもっともつといい国にしよう

って親父が言った」

いい国？この国のどこがいい国なのか教えて欲しい・・・10のガキでもわかるくらいこの国は堕ちてるんじゃないのか？こういうのをきつと洗脳って言うんじゃないか？

な

「どんな風に・・・いい国にするんだろう」

な

「これ以上にもつとさ」

「・・・この戦争をしてもいい国なんだ

な

「この戦争は悪い奴らを抑え込むためさ」

曇れることのない海は・・・・・・・・

「悪い奴って・・・？」

「フュール以外にいるわけないだろ？」

お前・・・そんなんでこの国の官吏になって・・・どうせもつとこの国をおかしくなっていくんだろ？こんなのがいるから世界は狂っていくんだろ？」

Conclusion了当(後書き)

えつとちなみに作者の言い訳です。これは前話で大間違いをしましてまいまして……。良春と立那の子供は海音と3歳差にさせなければならなかったのに……。海音が10歳の時に出来てしまうと……。10年後の話が大ずれになってしまつので……。ちなみ……。その作者のいい加減な設定のせいで出来た立那との二人目は……。どうしましようか？さてこの後の話は20歳になった海音のお話です……。長編過ぎる長編なので章の中でも分けたほうが……。とか思ってます

曇れることのない海は……………

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1073a/>

曇れることのない海は・・・・・・・・

2008年11月7日06時55分発行